

## 研究成果報告書

- ・機関及び学部、学科等名 富山大学人文学部人文学科
- ・所属ゼミ 文化人類学研究室
- ・指導教員 野澤豊一、藤本武
- ・代表学生 重吉桜
- ・参加学生 稲ヶ部美央、鹿住笑那、佐藤杏未、中井理恵子、原七泉、平島小夢、苗聖、安田優美香、山口昂良

### 【研究題目】

射水市新湊旧市街地（内川地区）における空き家利用の促進を目指した基礎調査

#### 1. 課題解決策の要約

本研究では、調査をふまえて次の提案を行った。まずは、景観を守ることを主たる目的とするにあたって、その区画を明確にすることである。次に、地域の価値を発掘したり、それに惹かれて集まってきたりする人びとの活動を発信するために、個々の活動の情報を集約する。その際には、内川に魅力を感じる特定の層にアピールするために、Instagram や Twitter などの SNS を利用することが有効であると考えられる。

#### 2. 調査研究の目的

内川地区は歴史ある景観が残るエリアだが、生活上の不便から空洞化が進み、空き家が他の地区と比べて格段に多い。道路を拡幅したり民家を改築したりすることで、生活上の不便はある程度減らすことはできるが、そうすると歴史ある景観を残せないというジレンマがある。他方で、内川に住んだり、内川で商売をしたりすることを考える人も多い。そうした人々が空き家を利用することができれば、景観を残しながら町の活気を保つ方法が見えてくる可能性がある。

本研究では、以上の課題をふまえて、内川地区における空き家利用を促進するための基礎研究として、空き家の現状、現地住民の意識、移住者の語りをまとめ、記述する。そこから、空き家がより有効に活用されるための提言を行うことを目指す。

#### 3. 調査研究の内容

##### 内川の歴史、人口変動、空き家の現状

内川周辺地域の町並みは、人々の営みの歴史が反映され、形成されてきた。近世から明治にかけて廻船業により新湊（放生津）が栄えた時代には、北前船や能登通いをする大小の船が運び込む荷物を積み下ろすために、内川沿いに内蔵を持つ家が多く建てられた。内川に面する町は、表通りから内川までの細長い大きな家屋が並び、新湊独特の家並みを形づくっている。一方、湊橋から放生津八幡宮までの海側へ一步入った通りは、地場産業を支えた船子や漁師達の家屋が立ち並び、間口の狭い家屋が密集する下町的な通りが形成さ

れた。現在では、再開発が進められているが、一部地域では、今でも家屋が寄り添うような景観を見ることができる。内川の南側は、商工業を生業とする家が多く集まっていた。なかでも、西新町、東新町の商店街通りは、老舗の名店が今でも営業を続けていて、昔ながらの雰囲気が漂う通りである。



写真1 内川沿いの景観

射水市の平成30(2018)年の人口は93,084人、世帯数は35,114世帯である。そのうち新湊地区は、平成27(2015)年時点で、人口33,251人、世帯数11,645世帯である。新湊地区の人口は、40年の間に47,882人から37,287人と減少している。そのうち、内川周辺の地域である放生津・新湊・庄西地区の人口は、40年で30,097人から15,878人に減少している。一方、海老江地区、七美地区、片口地区などその他の地区は、すべて人口が増加している。このことから、新湊地区の中でも内川周辺の地域で特に大幅な人口減少が起っていることが分かる。言い換えると、旧新湊市における人口減少の大部分を内川周辺地域が占めていると考えられる。

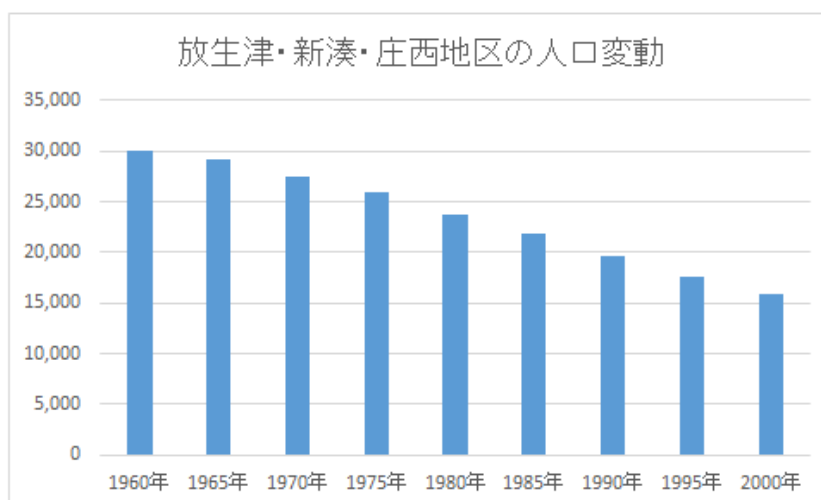


図1 内川周辺地域の人口変動（新湊市統計書を元に作成）

新湊地区における空き家数は864戸で、新湊地区の世帯数の6.8%に当たる。これは、射水市全体の空き家数の63.9%を占める。このことから、新湊地区は、射水市の中でも

空き家問題が比較的深刻であることがわかる。

表 1 射水市の地区別の空き家実態（NPO 法人水辺のまち新湊の資料を元に作成）

地区	新湊	小杉	大門	大島	下村
空き家数	864	287	124	71	6
空き家率	6.80%	2.40%	3.00%	2.00%	1.00%
地区比率	63.90%	21.20%	9.20%	5.30%	0.40%

\*地区比率・・・射水市全体の空き家数に対する割合

### 地元住民の空き家に対する問題意識

今回の調査では、実際に地元の方々が空き家に対してどのような問題意識をもっているのかを尋ねた。地域振興会長によると、若者は、庭のある家や広い道路を好み、結婚すると高岡の田んぼの跡地等に家を建てて移り住むため、高齢者だけが取り残されるという。また、今の時代は子どもが親から独立する傾向があり、昔のように長男が家を継ぐことが少なくなっていることも影響して、高齢化が進んでいる。こうして住民が減ることで、お金を落とす人も減少し、商店が閉まってゆくと語った。実際にその他の聞き取りでも、子供が内川地区の家を継がないというケースが多いことがうかがえた。

東新町商店街のある店主は、商店街は店を閉めている家は多いが空き家は少ないという。一人暮らしの高齢者、特に女性の一人暮らしが多いそうだ。昭和 33 年頃は商店街が栄えており、内川周辺で大きな商店街として賑わっていた。この通りは道幅が狭いため、車社会になったことで人口減少が進んだのではないかという。西新町商店街にある餅店の店員は、最近奈呉町では多くの空き家を取り壊しアパートや更地にしたため、以前より空き家は減った気がするという。空き家は放置しておくで崩れ落ちる危険があり危ないので、なくなって良かったと語った。

以上から、地域の人々は空き家の増加や人口減少、少子高齢化に対して問題意識を持っていることが分かった。その中で、内川周辺の道幅の狭さや駐車場の少なさといった生活上の不便さが若者の流出とそれに伴う空き家の増加を後押ししていることが考えられる。

### 内川の魅力に惹かれる人びとの存在

人口減少が進んでいる一方で、映画のロケ地に選ばれるほどの景観のために内川地区へと移住してくる人が、この数年で増えている。例えば、NPO 法人「水辺のまち新湊」は、内川地区の 3 つの空き家を利用した移住体験施設を運営することで、移住者の増加を目指している。平成 29（2017）年には年間 577 人、1,336 泊の利用があった。平成 19（2007）年から始まった取り組みの結果、平成 30（2018）年までの 11 年間で 32 人、23 世帯の移住が実現している。

移住体験施設とは別のルートで内川に移り住んだり活動拠点を持ったりした人もいる。内川周辺で空き家リノベーションを行ってきた明石博之氏は、元々、東京を拠点に全国各地で地方のまちづくりコーディネーターをしていたが、地方の食材や景観、地域の繋がりといった魅力に惹かれて、奥さんの実家がある富山県に移住して来た。空き家のリノベーションは、家を取り壊して新築するよりも多くの費用がかかる。しかし、一度壊してしまうと建坪率の問題により建物の前後左右に隙間が必要になるため、実質元の建物の半分くらいの家しか建てられなくなり、景観が損なわれてしまうという。明石氏は地域に根差したモノや景色を「マチザイ（まち財）」と呼び、それを次世代に受け継ぐべく活動をして

いる。たとえば、明石氏が手掛けた cafe uchikawa 六角堂は、元畳屋だった空き家をリノベーションしてできたカフェである。三叉路の角にあって、四角い家の角を二回切られた六角形の建物だ。この地域では「角切り」といい、祭りの際に曳山が通りを通りやすいように作られている。こうした特徴も内川ならではのマチザイと言えよう。

米国ハワイ出身のスティーブン・ナイト氏は翻訳業を営みながら新湊・内川で暮らしている。旧知だった先述の明石氏に誘われて内川に旅行に来た際、その町並みや橋の架かる水辺の景観に感動したことから射水市への移住を考えるようになったという。その後、東京で開かれている移住フェアなどにも参加し、新湊・内川に移り住むことになった。また、長年の夢であったバーを開きたいという思いから、古民家再生を手がける明石さんと話し合いを進め、町家を改築したバーをオープンした。

内川にはほかにも、この数年のあいだに、アンティーク着物の着付けサービスを提供する貸衣装屋 KIPPO が開店したり、作家が工房（アトリエ兼店舗）を構えたりしている。

以上からうかがえるのは、内川の魅力がしばしば「外部の視点」によって発見されるということである。たとえば、「ぶりっじ」というフリーペーパー（小冊子）には、内川に多い町屋の建築上の特徴やリノベーションの事例が、きれいな写真付きで誰にでもわかるように紹介されているが、これを企画・発行したのは地域おこし協力隊として他県から来た沼尻美帆氏である。地元の人にとっては当たり前で何でもないことが、県外出身者にとっては新鮮な、見るべきものとなるという事実は、この上なく重要であろう。

#### 空き家の利活用につまづく問題点

このように、景観や文化のために内川に居住したり店舗を構えたりしたいと考える人は少なからず存在するのだが、実際にそれが実現することは比較的少ない。NPO 法人「水辺のまち新湊」で理事を務めている二口紀代人氏によると、内川周辺の空き家には、相続問題、家の境界線が曖昧、500 万円以下の儲からない物件が多いなどの問題がある。結果として、不動産業者は手をつけたがらない。また、内川周辺には状態の良い空き家は少なく、高額な費用がかかるリフォームが必要な家が多い。取り壊して新しい家を建てる方が安くつくが、一度壊してしまうと新築時には 60% の建蔽率に縛られるため、内川独特の建物が密集した古くからの町並みを残していくことはできない。水辺のまち新湊では、空き家の売り手と買い手のマッチングに着手しているが、以上のような問題があるために、難しさを感じているという。

他にも、空き家の情報が不特定多数の人に届かないという問題がある。水辺のまち新湊でも、空き家の情報を集めるためには各町内の自治会長に情報提供を頼まなければならないが、それも難航する場合がある。どの住宅が空き家かを知ろうにも、持ち主がプライバシーを守りたければ難しい。また、内川では空き家を持っていても見知らぬ人に売ったり貸したりすることは嫌われる傾向があるという。実際に、今回の調査で空き家が利用されたいくつかの例は、知り合いを通じたものであった。たとえば、町家が密集する八幡社周辺では、地元住民が近隣の空き家を買って駐車場や物置、風呂場として活用するケースがあったが、そのいずれも個人的に話を持ち掛けられるなどしたものであった。先述した KIPPO や明石氏がリノベーションした空き家の多くも個人のやり取りを通じて実現したものである。

#### 4. 調査研究の成果

以上から明らかになったように、内川地区では人口流出に伴う空き家が増えつつあるも

のの、その景観、伝統、文化に惚れ込んだ人びとが市外、県外、国外から移住してきたり仕事の拠点を作ったりしている。ここで問題となるのが、景観やまちなみの魅力がむしろ地元によく理解されていないということである。狭い道路や駐車スペースがないという不便のために若者は出ていくのであり、道路を広くしたり家を新築することで景観が変化することに抵抗があるという地元住民は、むしろかなり少数であることが分かった。もうひとつの課題は、仮に外から移住を希望する人がやってきたとして、どこに空き家があって売り手が誰かという情報が、地元住民のインフォーマルなネットワークにアクセスしなければなかなか得られないという点である。これには、見知らぬ人には不動産を売れないという感情も関係している場合があることが分かった。

## 5. 調査研究に基づく提言

以上が本研究の成果だが、最後に、それをふまえて空き家がよりよく活用されるための提案を行う。まずは、景観を守ることを主たる目的として掲げるのであれば、その区画を明確にして、その他の区画と区別することが必要ではないか。それによって、今のところ人びとには想像しづらい「景観」という概念を、地元住民に意識してもらうことが可能になるだろう。次に、地域の価値（明石氏の言う「マチザイ」など）を発掘したり、それに惹かれて集まってきたりする人びとの活動が、より多くに知らされなければならない。そのためには、まず個々の活動の情報をどこかが集約する必要があるだろう。また、その際には外部の人の視点を入れることが肝心である。というのも、空き家を利活用する可能性が高い人のなかには、しばしば新湊の外からやってくる、比較的限られた層だからである。そうした人びとにアピールするためには、InstagramやTwitterなどのSNSの利用も欠かせない。地域の伝統にふれるためには、たとえば移住体験施設などが整備されつつあるが、そうしたハードを紹介するためのソフトを充実させる必要があるだろう。

## 6. 課題解決策の自己評価

区画の明確化や情報の集約には、地元住民の合意や行政の介入という高いハードルがある。その意味で、本調査には「基礎研究」の域を越えられない部分があると考えられる。他方で、現地住民の声をベースとした私たちの提言は、今後の内川の行く末を考える際の大きなビジョンを描くための助けになりうるものとも考える。